

上野殿御返事

弘安二年一二月二七日 五八歳

白米一駄だをくり給たび了んぬ。

一切の事は時による事に候か。春は花、秋は月と申す事も時なり。仏も世に出いでさせ給ひし事は法華經のためにて候ひしかども、四十余年はとかせ給はず。其の故を經文に説とかれて候には「説せつじ時未だ至らざる故なり」等云云。なつあつわたの夏 厚 綿 小 袖こそで、冬かた帷びらを給たびて候は、うれしき事なれども、ふゆの小 袖こそで、なつのかた帷びらにはすぎず。うへて候時の金 湯こがね、か御 料させる時の飯これうはうれしき事なれども、はんと水とには過すぎず。仏に土をまひといらせて候人仏となり、玉をまひといらせて地獄へゆくと申すことこれか。日蓮は日本国に生まれてわ誑 惑くせず、ぬすみせず、かたがたの失とがなし。末代の法師にはとが科うすき身なれども、文をこのむ王に武のすてられ、いろをこのむ人に正直物の憎にくまるゝがごとく、念仏と禅と真言と律とを信ずる代によ あ値ひて法華經をひろむれば、王臣万民に雪にくまれて、結句は山中に候へば、天いかんが計らはせ給ふらむ。五尺のゆき雪ふりて本よりも通かよわぬ山道ふさがり、と訪いくる人もなし。衣も薄 寒うすくてかんふせぎがたし。食たへて命すで絶 終にを嘆はりなんとす。か刻ゝるきざみにいのち命さまたげの御と訪ぶらい、かつは悦よるこびかつは嘆なげかし。一度にを思もい切飢 死つてうへしなんと案あんじ切尊つて候ひつるに、わづかの僅 灯 火 油ともしびにあぶら尊を入れそへられたるがごとし。あわれあわれたうとくめでたき御心かな。釈迦仏法華經定めて御計らひ候はんか。恐々謹言。

十二月廿七日

日 蓮 花 押

上野殿御返事